

働きかけに対する意識的反応がみられない 超重症児への指導の成果に関する担任教師の認識

○野崎義和

(宮城教育大学教員キャリア研究機構)

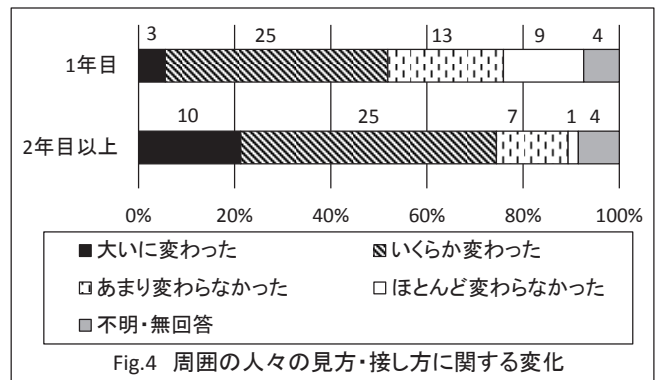
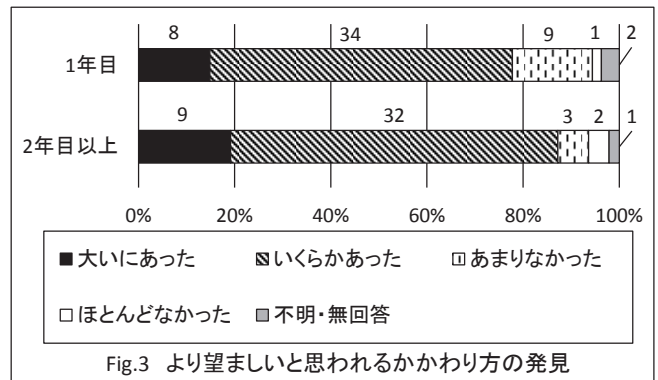
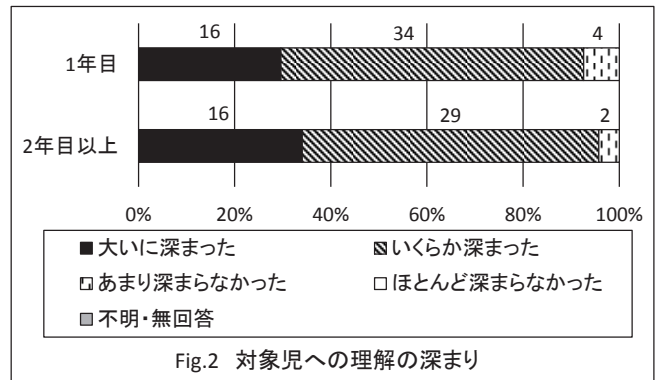
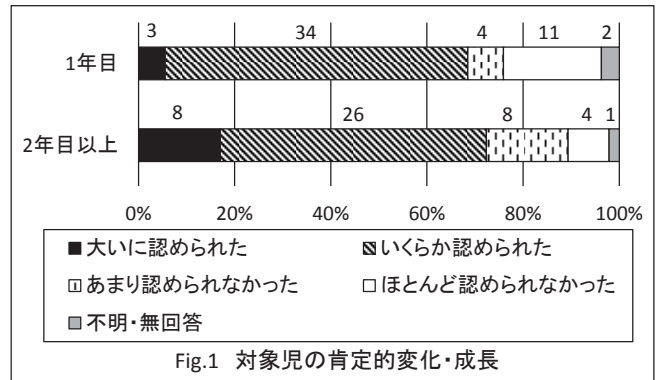
KEY WORDS: 超重症児 指導の成果 担任教師

【問題と目的】 超重症児への教育に関するこれまでの調査研究においては、指導の成果に関する情報がほとんど収集されていない。そこで筆者は、指導の成果に関する担任教師の認識を明らかにするための調査を実施した。そして本研究では、働きかけに対する意識的反応がみられない超重症児への指導に焦点を当てるとともに、担任期間による教師の認識の違いを検討することを目的とする。

【方法】 調査概要: 全国の特別支援学校のうち、知的障害(訪問教育実施校に限る)、肢体不自由、病弱のいずれかを対象障害種別としている530校に依頼文書と2種類のアンケートを郵送した。1つは学校全体での超重症児の在籍状況を探ったもの(アンケートI)であり、もう1つは超重症児を1名挙げ、その子ども(以下、対象児)への指導の実際について回答してもらうもの(アンケートII)である。アンケートIは各学校に1部送付し、重複障害学級担当者に回答を依頼した。アンケートIIは各学校に4部送付し、回答は選択した対象児の担任教師に依頼した。調査期間は2016年1~3月である。なお、結果の公表においては、個人等が特定されぬよう十分配慮することを依頼文書で説明した。分析で取り上げる調査項目: (1)対象児の脳機能障害の程度…「昏睡状態、あるいは睡眠と覚醒の区別が困難である」(A群)、「睡眠と覚醒の区別は可能であるが、刺激に対する意識的な反応はみられない」(B群)、「刺激に対する意識的な反応はみられるが、双方向的なコミュニケーションは難しい」(C群)、「何らかの手段(動作、表情、支援機器の利用等)での双方向的なコミュニケーションが成立している」(D群)の4区分の中から1つ選択してもらった。(2)担任期間…「1年目」「2年目」「3年目以上」の三択とした。ただし分析では、「2年目」と「3年目以上」を統合した。(3)指導の成果…「対象児において肯定的な変化や成長が認められた」「自分自身における対象児への理解が深まった」「より望ましいと思われる対象児へのかかわり方に関する発見があった」「周囲の人々(保護者・医療関係者等)における対象児への見方や接し方が変わった」の4項目について4件法(「大いに~」「いづらか~」「あまり~なかった」「ほとんど~なかった」)で尋ね、回答者の認識に最も近いものを1つ選択してもらった。

【結果と考察】 269校より回答が得られ(回収率50.8%)、このうち174校において超重症児が1名以上在籍していた。アンケートIIは全体で365件の回答が得られたが、その中からA群またはB群を選択し、担任期間に関する回答のあった101件(1年目54件、2年目以上47件)を取り上げた。そして、指導の成果に関する回答の内訳はFig.1~Fig.4の通りである。顕著な差があるとまではいいがたいが、担任期間が1年目よりも2年目以上のほうが、教師は様々な面で指導の成果をより強く実感していることがうかがわれた。このように今回の結果は、担任の継続、つまり長期的視点をもって子どもとかかわったり実践を省察したりすることの意義・重要性を裏付けるものであったといえよう。

【付記】 本研究は、JSPS 科研費 JP15K17419 の助成を受けたものである。



(NOZAKI Yoshikazu)